
不安定な戯れ

野狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不安定な戯れ

【Nコード】

N5681K

【作者名】

野狐

【あらすじ】

仕事で咎められ、失望しながら橋の下を眺めていた千原幸太郎は、服のまま川に浸かる奇妙な男を見つけた。興味本位でその男に近づくが……

男との邂逅は思いもよらない戯れの始まりだった！己に潜む不安定な精神との戦いを描く、人生の皮肉さと奇妙さに満ちた作品。

その一

橋の上から下を流れる川を眺めて、川の中に足をつっこむその男の姿を一見したときには、最初は男が何か大切なものを川の中に落としたのだと、そう思った。もう一度それをよく見たとき、千原浩太郎は男の手に何か長い棒のようなものが握られているのに気づいた。杖のようにも見えたので、不安定な川底にしっかりと立つために自ら用意したもののなか、たまたまその辺に落ちていたり、流れしてきたものを何気なく手にしたのは分らないが、男は棒切れを川底に突き刺すようにして持っている。

浩太郎はしばらく橋の上で男の様子を眺めていたが、次第に気になり始めていた。

「おい、あんた！そんなところで一体何をしているんだ？」浩太郎は男へ向かって呼びかけた。

しかし男に声は届いていないようで、男は一度顔を上げて周りをきよるきよるとした後、手元の棒切れを見つめてからもう一度作業に戻った。

鼻を鳴らし、もう一度男に呼びかけようとして止めた。どうせ聞こえはしないだろう。浩太郎は橋の欄干に、手にしたパン屋の紙袋ごと寄りかかると橋の下をのぞき込み、それから不思議な男のいる川縁へと降りてみることにした。なあ、浩太郎、行ってみればいいよ。

物事の決定権は誰にある？それは浩太郎、お前自身の中にあるんだ。だから人は納得するまで考えなければならぬ。

父の言葉。

千原浩太郎の父は中学、高校生を教える現代国語の教師だった。毎朝自分よりも数時間も早く学校へ出かけていく父は、自動巻のダイバーズウォッチを腕に巻いてから針を合わせ、靴を履き、少し深めの帽子を被って出て行く。朝は必ずみそ汁を飲んだ。

“治さん”それが生徒たちからの父のニックネームだった。

「お前は将来何になりたいか、考えたことはあるか？」

ある休日の昼食の時間、表面が焦げるくらいに焼いたウインナーをパンに挟んで頬張っていると、テーブルの対面に座った父はコーヒーを啜りながら言った。

浩太郎は父の質問にすぐには答えられず、口の中にパンを詰め込んだまま止まっていたが、頭の中だけはいやに回転していて、様々なことを思った。父さんは食事のときにぺちやくちやお喋りするの嫌いなのに、こうして自分から話を始めるなんて珍しいな。機嫌も良さそうだ。でももしかしたら僕をはめようとしているだけで、本当は怒っているのかも・・・だとしたら父さんの本を勝手に持ち出したのがばれたか？階段の手摺りに“KC”と掘ったのがばれたか？なあ、どう思う？

「浩太郎？」

「はい、父さん！」浩太郎はいささか驚いた表情で答えた。

「どうした？そんなに驚かせてしまったか？」父は少しだけ笑った。

「まず口の中のものを食べてしまいなさい」

浩太郎は必要以上に長く口の中のパンを噛むと、ゆっくりと飲み込んで、それから長い息を吐いた。

「質問は何だったっけ？」浩太郎は言った

「うん、お前は将来の夢とかを持っているか？夢といわなくても、目標や・・・お前が進もうとしている道を見えているか？」

「・・・分かりません、まだ」浩太郎は首を振った。「でももしかしたら父さんみたいな教師になっっているかも。ほら、医者やスポーツ選手の子供が父親と同じ道を進むでしょ？芸能人も多そうだな、

うはっ」

「浩太郎」父は少しきつい口調で浩太郎の名を呼んだ。

「はいっ」と浩太郎。

「自分の親がそうだから、周りがそう言うからならなければならないと・・・お前はそんな風に考えているんじゃないだろうね？」
「コーヒーカップをテーブルに置き、両手を組んで父は続けた。「お前は私の子供だが、お前はお前なのだ。お前も早十四歳だな。決定権はお前にある。周りがあれやこれやと決めつけていいものではないのだからね。決めるのは自分自身だ。自分自身の声をよく聞きなさい。そして納得するまで考えて決定しなさい」

浩太郎は少し沈んだ面持ちで父親の顔をのぞき込み、わずかに震えて答えた。

「そうじゃないんだ。父さん・・・本当になりたいと思って、父さんのような教師に・・・」

父は浩太郎の瞳をしっかりと見て、一呼吸おいた後「そうか、ならばいいんだ。すまない。お前がなりたいたいのならね」そう静かに言っただけでコーヒーを飲み始めた。

穏やかな表情だった。

川縁へと降りた浩太郎は男のことを黙って見守るつもりだった。

ただ少しだけ話しかけて了解をもらったあと、その辺の石に腰掛けて見守る。川の男とのやりとりはそれだけのつもり。しかし先に話しかけてきたのは予想外にも男の方だったのだ。

男はやはり足を川の中へ入れたままの状態で木の棒を杖代わりに立ち、そして言った。

「君、俺に何か用事があるのかな？それともこの川縁は君の特等席か何かか？」

いきなりのことで浩太郎は、それが自分に向けられた言葉だとすぐに気がつけなかった。それで浩太郎は鹿のように首を伸ばして辺りをキョロキョロしたあと、どうやら自分しかいないのだと分かる

と自分自身を指さしながら小さく「俺？」と言った。

「そう、君のことだ」男はすつと手を上げて浩太郎を指さした。「俺のことをさつきも上から見ていたね。何か言っていた様子だったが」

浩太郎は男の言葉に一瞬驚いて心臓が強く打つのを感じた。

「そうなんだ・・・なんだ気づいていたのか」浩太郎は言いながら男に近づいていった。「それならいいんだけど、さつきから・・・」
「悪いんだが！」男が声を上げた。「それ以上進まないでくれ、君のために」

浩太郎はつんのめりながら立ち止まり、驚いた表情のまま男を見やった。

「あと五歩右を歩いた方がいい。君から見てね」と男。冷静で丁寧な物言いで。「ほら、その下濡れているだろう？さつき見つけたんだが、意外とこの水溜まりはでかいよ」

一歩進んだ足下には短い草が固まるようにして生えている。浩太郎がその草溜まりをよく見ると、太陽の光にわずかに照らされて、草溜まりの下を水がサラサラと流れているのが見えた。

立ち止まった浩太郎の姿を見ると、男はニコリと笑ってうなずいた。

「ああ、ありがとう」浩太郎は軽く感謝した。

「いや、構わないよ。ところでもしも用事があるのなら少しだけ待っていてくれないか？もう少しなんだ。もう少して終わる」男は言った。

浩太郎は乗り出して、一体何をしているんだ？と、そう聞きたかった。しかし男のガラス玉のような薄い目を見ると萎縮して何も言えなかった。浩太郎は五歩右から回り込み、腰掛け程度の小さな丸石に座って待つことにした

男は再び川へと向き直り、今度は少しだけ深いところまで入り込んでゆく。膝下まで川の中に沈み、男の膝のところで水が砕けて白い飛沫が舞った。先ほどと同じように何度か手にした木の棒を川底

に突っ込んで、時折何かに納得したらしく、餌をつつく鳥のように素早くうなずいて見せた。

男の姿はこうだ。頭にはベージュと薄い朱色のハンチングを被り（シャーロック・ホームズか、もしくはこちらの方が今や分かりやすいかもしれないが、名探偵コナンが被っているようなやつだ）、薄いピンクのクレリックシャツを着ている。およそウール素材の灰色のチノパンを履いていて、膝からは川に浸かっただけ上に見えない。歳は二十六歳の自分と同じか、もしくはもう少しだけ上に見えた。ハンチングの下から半分だけ下ろした前髪がユラユラしている。

夏は完全に去ろうとしていたし、気づけば十月もすぐそこまでやってきていたので、もう川遊びをしている人などはないが、それでもまだ今年は蒸し暑かった。初秋の風が水面を滑るようにして風上から流れ吹き、水面に波紋を立てた。作業をしていた男もしばし作業を止め、川上の方を静かに眺めていた。浩太郎も同じだった。

風が止むとまた川縁は静かになり、音もなく流れる川は綺麗だったが、それでも陰気な印象に映った。川縁に植えられた常緑樹や勝手に生えそろうた雑草の茂みは秋特有のもの憂げさからなのか、妙に埃っぽく、これからじわじわとやってくる冬に対してすでに諦めているか、打ちひしがれているようにさえ浩太郎には思える。何年か前に地元の小学生たちが川の緑化運動と銘打って（何か目標か目的みたいなものがあつたような気もする。川に生き物たちを呼び戻す、だとか、生き物たちの住処は川の浄化へつながる、のような）川縁に花や木を植えていたが、その管理を徹底していたのはそれから一年あまりで、茂みに潜んでいた水溜まりに小学生が足を突っ込んで大怪我をすると、その後は管理がされなくなった。一体あの運動は何だったのか？おかげで川縁には植物が彼らの楽園よろしく好き放題に生え茂っている。人が手を出さない方がきつといいんだ、とそう思って浩太郎は一人苦笑した。

浩太郎は手にした紙袋からクリームパンを取り出すと、紙袋をクシャクシャに丸めてポケットへ突っ込んだ。昼飯にと買ってきたパ

ンは家に帰ってから食べようと思っていたが、この男を眺めながら食べてしまう。どうやらこっちの方が興味深いし面白そうだと思った。駅前のパン屋“杵屋”のクリームパンは人気があつて滅多なことでは残っていないが、今日は偶然にも一つだけ残っていた。小学生の頃父親がもらつてきたものを食べて、美味しいと思つたあの味を覚えている。今こつやつて食べてみても確かに旨い。クリームの甘さが絶妙だし薄い生地がクリームを邪魔せずに包んでいる。なにどうしてあそこのあんパンだけは美味しくないのか・・・甘すぎる。

トラックが一台、橋の上を走り去つていった。再び風が吹き、さつきよりも少しだけ強い今度の風は、川縁の色んなものの隙間へ入り込みながら、ウーウーと下手な口笛を吹いた。強い日差しが浩太郎を照らし、浩太郎はそれを手で押しのけるように防いだ。それで効果があるようには思えなかつたが、気持ちだけは幾分ましになつた。

「何だあれは・・・雲？」浩太郎は呟いた。

空の端の方に、一際大きな雲が見えた。真夏の積乱雲のような巨大なやつだつたが、それとはまた違う風に見えた。それはどうやらこちらに向かつてゆつくりと流れてきているらしく、この忌々しい日差しが止んで日が落ちるのが早いか、あの巨大な雲が空を紫色に覆い尽くし、日差しを遮る方が早いか、いずれにせよその内に暗くなりそうだった。

おい、相棒、お前はどつちが早いと思う？雲が早い？それとも時間の方が早い？浩太郎は自分に問いかけるようにそう思った。

浩太郎は顔を上げた。すると男が立ちつくしたままこちらを見ている。浩太郎は手を軽く上げて男へ合図を送つた。別に何の意図もない、ただ単に合図を送つた。それからもう一度空を見上げて大きな雲を眺めた。

ふいに面白い幻想が頭をよぎつた。冒険ものの小説やファンタジー作品などを読み漁っているようなものに生まれる、突飛な幻想と

言えるだろうか。巨大な雲が突然割れるように左右に裂け、その向こうから巨大な空飛ぶ戦艦かUFO、もしくはドラゴンなんかが姿を現すのだ。浩太郎はぞくぞくしながら想像した。しかしそれは決して味方などではない。火を噴きレーザー光線を雷のように落としながら町を破壊し近づいてきて・・・浩太郎は激しく心臓を鳴らしながら恐ろしい光景に目をつむった。

一度立ち上がって背筋を伸ばしてから、深く深呼吸をして自分に言った。「くだらないことを考えすぎだろ」

男は未だにこちらの方を見ている。手にした棒をだらりと下げ、水に沈んだその先端は白く砕けた波を伴っている。風がまた吹いた。それからすぐに男が川から上がってきた。音を鳴らしながら川の水を押しつけ、川岸に上がると、男の靴の端から溢れるように水が流れ出した。チノパンは水に濡れ男の足にべったりと張り付いているし、裾からは滴がしたたり落ちていく。

「やあ、待たせたね」男は大きな声で言った。はつきりと浩太郎に聞こえさせるためには大声を出さなければならなかったのだ。男は濡れた足を引きずりながら前へ進み、浩太郎の方へ歩いてきた。

「そんなことないさ」浩太郎は言い返して同じように男の方へ歩いていった。

男はうなずき、手頃な石に片足を乗せると靴を片方だけ脱ぎ、中に溜まった水をはき出させた。男の履いていたティンバーランドの茶色いスニーカーからは水が流れ落ちた。

「もう作業は終わったのかい？」浩太郎は聞いた。

「ああ、とりあえずはね」と男。

「本当に？」

「ああ、もう確かめたからね」

「確かめたって・・・川に入って何を？」

男は答えなかった。代わりに浩太郎の目を爬虫類みたいに鋭く見返して、浩太郎を驚かせた。浩太郎は目を見開いたままで息をのみ、それから目をそらした。

「服のまま入っちゃって、大丈夫なのかい？」

「大丈夫さ」

まだ日差しは大地を照らしていたが、空の端にあつた巨大な雲は音もなく空全体へと広がろうとしていた。雲は灰色の不気味な雲で、どうやら雨雲のようだった。この巨大な雲は雷を落とすかもしれない。それならばさっきの突飛な考えもあながち間違ではないかもしれない。男は足元を見ながらもう片方の靴の除水作業を始めている。浩太郎はぎこちなく肩を回した。

「雨が降りそうだな」男が言った。「もう少しで本格的なやつが」

「そうみたいだな、さっきからどんどん大きく広がってる」

「向こうの方だと、あの雲の下だともう降っているな」

「かもね」簡単に答えた。

「かも？かもだつて？」男は顔を上げた。その声は少しだけ苛立っている様子だ。「降ってるに違いないだろ」

「あ、ああ、降ってるよ、絶対に」そう言いながらも全くもってどうでもよかった。

男は満足したように優しい表情を取り戻して浩太郎に向けた。

浩太郎は雨が降り始めるのを想像しながら雲を見た。色づいていたものが全部雨の灰色に変じてゆくだろう。予期せぬ突然の雨に人々は走り回り、商店の店先に肩も狭しとみんな雨宿りをする。その前を傘もささない元気な学生たちや急いで走るサラリーマンが通り過ぎて行く。自動車はワイパーを全力で動かしながら、道路にできた水溜まりをはね除けて進むのだ。しかし雨が止めばこの暑さも止んでゆくに違いない。冬に向けて寒さがゆっくりと包んでゆくに違いない。

その二

浩太郎が八歳の時、父と母が離婚することとなった。教師である浩太郎の父浩助は寡黙だが仕事熱心で真面目な人物で、どんな生徒にも分け隔てなく接することが出来る人物だった。生徒たちからは尊敬され、太宰治の肖像と似ていることから“治さん”と呼ばれた浩助。だが一方でそれが気に入らなかつた母。母は実際の歳よりも遙かに若く見える美人で、浩太郎には子供ながらに自慢の母親であったし、母の胸に抱かれると何よりも暖かく、何かもつと偉大なものに包まれている感覚が体全体を駆け巡るのだった。そんな母は父親が自分にかまってくれないので外で男を作り、それは父の責任だと決めつけた。

「あなたが私を見ていないから！」母は怒鳴った。「あなたのせいで私がどれだけ辛く思ったか分かってるの？」

父は何も言わずにソファに腰掛けうつむいていたが、浩太郎には分かっていった。父は不器用なだけで誰よりも母のことを愛している。こうなつて一番悲しんでいるのも父なのだ。だが父は何も言わなかつた。

結局二人は離婚することとなった。

母は息子を抱きしめながら言った。「これ以上はお父さんとは暮らしてはいけないの。お母さんとこの家を出るのよ。あなたにはもつとあなたと遊んでくれる、新しいお父さんが待つてるわ」

しかし息子は母の手をゆっくりと解き、少しだけ微笑んだ。

「僕はお父さんと一緒に暮らすよ」

父は驚いたように息子に駆け寄って抱きしめたが、はっと我に返ると息子からわずかに離れて見守った。

「どうしてこんな人と」母は動揺していた。「いいえ、浩ちゃん、あなたには・・・新しいお父さんは何だって買ってくれるわ！ゲームだってサッカーボールだって、それに欲しがってた自転車だって・・・それに・・・」

「僕のお父さんは一人だけだから」

母は打ちひしがれたような表情を見せたが、すぐにいつもの強い表情を取り戻し、ほとんどの怒りを露わにした。

「あなたね！あなたが浩ちゃんに何か吹き込んだのね？そうに違いないわ！」

「違うよ、僕は・・・」

「あなたは黙ってなさい！」

浩太郎は母の見たこともないような迫力に気圧されて黙った。

「いいわ、どうせ裁判になれば親権を取るのは大抵母親の方なんだから」母はそう言っ鼻を鳴らした。「あなたが何を言ったって・・・」

父は黙って聞いていたが、ずっと浩太郎の隣に進み出ると、息子の肩を優しく、しかし力強く抱いて「すまない」と一言だけ言った。それが自分に対してのものなのか、母に対してのものなのかは分からなかった。

母は父の言葉が自分に対してのものだと思ったようだが、それよりも父がそうやって謝ったことに驚きを隠せなかったらしく、それ以上はほとんど黙って、バツの悪そうに両手を組んだまま天井の隅っこと浩太郎たちとを交互に見やりたりしていた。

最後に出て行く直前、母はリビングの扉の前で浩太郎を抱きしめてさめざめと泣いた。浩太郎は父と母の離婚という現実を理解していて、それ相応の覚悟をしていたために泣かずにすんだが、この先母親のこの胸の中の暖かさの特製のコロツケが食べられなくなることは残念に思った。

何かもがどうでもよくなって、朝起きても母親がいなことに困惑することもなく、周りから冷たい子供だなどと思われようが、浩太郎は一向に構わなかった。それよりもむしろ父親が母親を追い出したなどと、近所でちらりとデマを聞いたことが許せなかった。たちの悪い噂話は子供の悪戯と一緒だ、と子供の浩太郎は憤慨してその噂話をしてきた家の玄関先にあつた鉢植えを、道路に向かってごろんと転がし、走って逃げたことさえもある。

しばらくして裁判やら何やらがあつたらしいが、結局浩太郎は父親に引き取られることになった。これはどういう理由からかは子供の浩太郎には素知らぬことだが、双方が納得したらしい。

一年後に母は再婚した。

二人で暮らすようになっても父と浩太郎のお互いに対する接し方はさほど変わらなかつたが、二人で家事をしていかなければならなかつたので、必然的に父子の接する時間は増えた。

「浩太郎は周りの人を大切にしているか？」

土曜日の晩、台所に立つて慣れない手つきで夕食を作っている浩助は、テーブルを拭いていた浩太郎に向かって言った。

「えっ？周りの人？」浩太郎は少し考えて「どうかな、でも友達が多いしみんな気に入っているよ」

「いいことだ」父は肩越しに笑った。「お前はいい友達に囲まれている。みんなのことを大切にして、尊重しなさい。それは尊厳に繋がる」

「尊厳だつて？」

「ああ、分かりやすく言うとみんなの存在を認めるといふことだ」父は続けた。「もしかしたらお前が大切に想つても中々伝わらないことがあるかもしれないが、大切なのはお前の心。お前はいろいろな人に囲まれて生きている。父さんも同じ。誰もが同じなんだから、自分に関わる人を大切にしなくちゃあな」

浩太郎は必死に考えてうなずき、父親に微笑みかけた。

「もちろんそうするよ。父さんの言うこともよく聞く」

「それは嬉しいな。でも浩太郎、物事の決定権は誰にあると思う？それは浩太郎、お前自身の中にあるんだ。だから人は納得するまで考えなければならぬ」父は言った。

「自分の中？」

「そうさ、自分の中に決定権はある。しっかりと自分で見定めて物事を決めるんだ。考えて納得して決めたことなら、それはきつと明るい道に続いている。その道は正しい道に違いないんだ」父は出来上がったカレーライスをお皿に盛りつけて、浩太郎の拭いたテーブルの上へと運んだ。「さあご飯を食べようか。ほらお茶を入れておくれ」

「はい、父さん」浩太郎は嬉しそうに取りかかってお茶を入れると、ついでにスプーンを取り、先に席に着いていた浩助に渡した。

「ありがとう」父は言った。

「自分で決めた道だね、格好いいや」

「ああ、格好いいだろう？尊厳と納得。それは信ずる道さ」

「ちょっと待て、畜生、こいつは蛇だ！」突然男は言った。

男が目を向けている先を見やると、オリーブ色の体に尻尾の先が黄色がかった一匹の蛇が茂みの中から出てきていて、水辺の小さな石と石の間を器用に進んでいた。アオダイショウという種類の蛇だった。

「俺は蛇が大の苦手なんだ！昔右のふくらはぎを噛まれたその痕が今でも残ってやがるんだぜ！」男は先ほどの落ち着いた態度とは一転した取り乱した態度で声を上げた。それはまるで一人で喜劇を演じているようだ。そう浩太郎は思った。

男は持っていた棒を振って蛇を威嚇している。棒で近くの岩を弾き、衝撃で棒の先が折れて飛んでいった。

「ああ！近くの公園で遊んでいるときだった。ボールが茂みに入っ
て、そこに蛇がいたんだ！きつとこいつはあのときの蛇に違いねえ、
また俺の足を、今度は左に食いつきに來やがったんだ！」

「おいおい、どうしたんだ？大げさだなあ、こいつはただの蛇だぜ？アイダイシヨウ。毒を持っていない種類のやつだ。噛まれたって大したことないし・・・こいつらは手足がない代わりに体の筋肉が発達しているけど、おたくは腹筋鍛えただけでケンカに勝てると思っ？」そう言っただけで浩太郎は蛇の尻尾を慣れた風につかみ挙げた。「ほら、こうすればいい」

蛇は何事かと浩太郎のつかみ挙げた手に攻撃を仕掛けたが、それよりも早く浩太郎は蛇を投げ縄みたく振り回し始めた。そして川へ向かって放り投げた。

蛇は音と小さな飛沫を上げて川へ落ちると水面に浮き上がり、体を鞭のようにぐねらせながら泳ぎ、向こう岸へとたどり着いた。忙しく岩の隙間へと姿を隠した蛇も内心は焦ったに違いないだろう。

小さな頃は昆虫や爬虫類なんかを捕まえてよく遊んだ。トカゲやオタマジャクシは簡単に捕まえられる。残酷な殺し方をしてしまうこともあったが・・・子供の頃の話だ。そう、子供の考えること・・・自分のことであっても思い出せないような、難しい昔の記憶の話だ。なかなか理解はできない。だがしかし、小さな頃にそうだったものに触れ合っていたおかげで今は何の抵抗もなく接することができる。「大丈夫、あいつらは泳げるから」と浩太郎。

男は目をしばたいて、蛇の様子をしばらく見ていた。

「そういえばあんた、さつき右のふくらはぎに蛇に噛まれた傷が残ってるって、そう言っただよな？偶然だが俺にも同じような傷があるんだぜ。あんまり覚えてはいないけれど、親父には蛇に噛まれたんだと聞いている」

浩太郎は屈んで右足のズボンの裾を上げようとした。しかし裾に手をかけた瞬間に男が口を開いて、浩太郎はそのままの姿勢でぴたりと止まった。

「ああ別に君の足に傷があるかどうかなんて興味はないんだ。知っ
ていても何もならないし」

「そうか、ならいいんだけど・・・珍しかったからさ」浩太郎は

残念そうに答えた。

「俺も取り乱したからといって無闇に自分のことを話すのは良くないと、そう教えられたよ。ありがとう、君」男はにやついた。「つまり蛇というやつは俺にとっては最悪のアンラッキーアイテムだっ てことだけが言いたかったんだ」

川の間こう岸を見ても、泳ぎ渡った蛇はどこに隠れているかは見えないし分からない。だがきつと恨めしそうな目で自分のことを睨んでいるんだろうな。浩太郎は考え、それから自分のアンラッキーアイテムを思った。

俺の場合は・・・なんだろう？

「ところでさ、おたくがあんまり取り乱すから、ははっ、その棒折れちゃったな」浩太郎は男の持つ棒を指さした。棒は先から四分の一ほどの部分で綺麗に折れて、先はどこかへ飛んでいつてしまっている。

「ああ？何だと？本当だ、くそう、棒が折れてしまってるじゃないか・・・やはり蛇のやつめ」男は深く息を吐いた。「最高の、一番いい長さだったんだけどな。どこかに代わりはないかな？」

男がきよろきよろと忙しく顔を動かしている姿を見て、浩太郎はその姿が妙に滑稽に思えた。何でこいつはこんなことをしているんだ？面白いやつだな。浩太郎はたまらず口の端を持ち上げて小さく笑った。

「ん？どうかしたのかい？」男が気づいて言った。

「いや、何でもないんだ。ただあんたが面白そうだからさ。あんたが一体何をしようとしているのかは知らないけれど・・・」

「知りたいのか？」

「えっ？」浩太郎はちよつとだけ考えて、真剣な表情をして向き直ると男を見て言った。「そりゃあ知りたいさ」

「どうして？」

「単なる好奇心さ。それ以上何もない」浩太郎は続ける。「あんただって同じだろう？服を着たままなのに、それなのにズボンも橋の

上をゆく他人も同じように無視して足を川の中に突っ込んでいる人間を見れば、どうしたんだろうって誰でも思う。靴だって履いてるだろ？何か落とし物でもしたのか？」

男は体をまっすぐに立て、幸太郎の目を入り込むような勢いでじっと見つめた。幸太郎は堪らずに視線を逸らし、水面に目をやった。「うん、君の言うことが分からないでもないな・・・特にその、ズボンも他人も同じように無視っていう言葉にグツと来た」男は手をぴしゃりと叩いた。「君はセンスあるよ。ちなみに靴も履いてる・・・」

「やっぱり大切なものを？」

「いや、だけど落とし物をしたわけではないんだ」

「じゃあどうして？」

「この川で死ぬるかどうか、それを調べるためさ」男はきっぱりと言った。

「冗談なら面白くない冗談だし、同じような冗談を言うやつなら友人にもいる。浩太郎は思った。」

「ああ、何もかも面白くないし死にたいぜ」

「そうやって遠くを眺めながら言うやつだ。浩太郎はこうやって簡単に、死にたい、なんて言うやつにはむかつ腹が立ったし、冗談だとしても聞きたくもなかった。その友人は翌日になって見れば、パチンコ屋になけなしの金をつぎ込んで大抵は勝つ。そして満面の笑みでハイライトを燦らせながら、ヤニの臭いのする声でこう言うのだ。」

「まだまだ俺には神が付いているんだな。まだ死ぬなだとよ」と。

浩太郎は男が言ったことを半ばすんなりと理解できた。そして連れの時と同じように腹が立つ・・・はずだった。どうして腹が立たなかったのか、浩太郎は瞬時に判断した。友人が言う、死にたい、なんて言葉は冗談だからだ。そんな覚悟も何も無いのに重い言葉を軽々と口にするその安っぽい態度が許せないからだ。だがどうだ？この男、目の前のこの奇妙な男は冗談を言っているような目じゃあ

ない。それは分かるさ。空気ってやつがあるだろう？マジな空気ってやつが。誰かが怒ったり、悲しんだりしているとき、どうやら話しかけられるような空気じゃあないって言うじゃないか。これにはあれと似たところがある。男の目は酷く澄んでいて、静かな目をしていた。

そんな男に浩太郎は興味を持ってしまった。

「おいおい……っていきなりだな。冗談……なんだろ？」浩太郎は言った。

その言葉に男は少しだけ不満そうな顔をして小さく首を横に振った。「やっぱり言わない方が良かったな。どうせそんな反応を見せるとは思ったよ。さあ向こうへ行ってくれ、君には悪いが邪魔になる」

男は浩太郎を払い退けるように手を振ると、川へと向き直ってまた足をつつ込み、今度は少しだけ深いところへ行つて棒を入れたり出したりを始めた。どうやら川の深さやら川底の様子を探っているようだ。浩太郎は川縁の岩の上に腰を下ろして、いささか緊張しながらその様子を見守った。

本当に死ぬつもりなのか？そのためにこうやって調査をしているっていいのか？そんなことって……なんて馬鹿馬鹿しいんだ。阿呆な戯れだ。理由は何だ？どうせくだらない、いやくだらないかどうかは俺が決めることではないけれど。うまく注意してやるよ。考え直すようにな、それができるか？俺に、だがなぜ止める？

男は川に入っている。浩太郎は石に座っている。色んな考えが浩太郎の頭を振り子時計のように行ったり来たりしていたが、どれもこれも不愉快な音を奏でていた。草がサラサラとなる音。川の流れる音。男が川の水をかき分ける音。橋の上を鈍い音を鳴らしてトラツクが通り抜ける音。蛇が体を地面に擦り付ける音も雲が流れる音も日差しの鋭い音も何もかもが不愉快に思える。本当にそんな音が聞こえるのか？そんな音が、本当に？どれもこれも不愉快だ。本当に不愉快。本当に？本当に？本当に？

浩太郎はいきなり立ち上がった。鼻を膨らませた。握った手の平の中で汗がじわりと滲むのを感じる。

さあ早く判断しろよ。

「なあ、ちよつと聞いてくれ！」浩太郎は声を張り上げた。

声に反応して男が振り返り、二タ二タと笑いながら川をかき分けて戻ってくる。短くなった木の棒を川の中へ放り投げて、棒は音を立てて水着すると川のネズミ色にとけ込みながら川下へ消えていった。男は川縁の石を黒く濡らしながらどこか自慢げに戻ってきて、浩太郎の前へ足を広げて仁王立ちすると顎をしゃくり上げた。

「どうやらここで俺が思っていたことは実行できそうだ。計画を知っている君は分かるね？さあ、最良の日だぞ！」男は得意気に言った。

「いやあ、その話なんだけど」と浩太郎。何をどうやって言う？シンプルに言うか？人生の素晴らしさを説くか？それにしても最良の日だって・・・ふざけてる。

「その話？もしかして君、俺の計画を止めようとしているのかな？」
「そのまさかだよ」浩太郎は答えた。

「よしてくれ、そんなこと。君は正義感で言っているのか？それとも平和主義者？心理学の話はできる？もしくは精神理論でもいいが、人の死には・・・」

「そんな話が見たいんじゃない」むつとして遮った。

「じゃあどう納得するつもりだい？」男がロボットみたく無感動に言った。

納得だと？浩太郎は思った。そんな風に父さんの言葉を使うな！
こんなやつに納得などできるものか。

「ただ見過ごすことはできないから」

「そうか、君はいいやつなのかも知れないな、きつと。その目だつて真剣だし、それにグツと来るね」男は小さなガッツポーズを見せて。浩太郎はポケットに手を入れて何も言わなかった。「こうやって目の前にしないと意外と人の良さは分からないかも知れない。

尊重もできたもんじゃあないからな。でもしかし君は悩んでいるね。どうかしたかい？」

「どうもしないさ」浩太郎はそう言って男から目をそらした。そらさずにはいられなかった。目の前の男（およそ死にかけの）よりも自分が下に思えて情けなくなつた。目の前の男はつきりとした像の自分を持つているように見えるが、自分は持ててはいないだろう。持つていたとして、崩れやすい砂の城で、波に寄せられればあつという間に飲み込まれてしまふさうだ。押し波に必死に耐えても、きつと引き際に連れ去られてしまふさうだ。作つては連れ去られ、作つては連れ去られるが、きつといつかは頑丈な城を築けるはずさ、浩太郎。

「俺は正しいと思うことをしただけだ」

「ブラヴォーだよ、君」男は目を見開き口の端を持ち上げて、首を上下させながら手を叩いた。「そう思うなら悩まなくてもいいんじゃないか？え？くだらないことに神経使いやがつて、それで悩むなんてくだらないぜ」

男の言葉遣いが徐々に汚くなつてきたことに浩太郎は少々驚いたが、浩太郎は冷静に男を見返した。ハンチングの下から見える瞳は恐ろしく澄んだ茶色をしている。入れ立てのストレートティーみただ。しつかりと二分間蒸らして入れたやつ・・・もしくはガラス細工のような。

浩太郎がポケットから手を引き抜くと、杵屋のパンの紙袋が地面に落ちて男の足下へと転がった。浩太郎が反応する暇もなく男は屈み込み、丸まつた紙袋を拾った。

「むっ、これは！」男の口から言葉が飛び出すように出た。「これはもしかして杵屋の紙袋じゃあないか？しかもこのにおい・・・わずかだがおいが残っているぞ！クリームパン！これはクリームパンのにおいだ！君、食べたのか？」

「ああ・・・食べたけど・・・」浩太郎は不思議そうに答えた。

「何てことだ、俺はまだ一度もこれを食べたことがないのに！どう

して一人で食べようとするんだ」男は独り言のように始めた。「分けて食べようとは考えないのか？どうしてこんな・・・」

「食べたかったのか？」

「食べたかったさ。せいぜい美味しかったろうよ、君は。滅多に食べれたもんじゃあないからな。知っていたくせに。君は兄弟が食べたがっていても平気な顔して一人で食べるんだろう？そういうやつさ」

「俺に兄弟はいない」

「そうか？本当にそう思っているのか？」

「本当だとも。両親は離婚したけれど・・・」そう言って浩太郎は自分が言わなくてもいいことを口走ったことを微かに後悔した。言ったところで何もならないとも思った。「とにかく家を出た母さんが別のところで子供を産んでいたとしてもそれを兄弟なんて簡単には言えない。俺は父さんと母さんの子供で、一人っ子なんだ。上も下もない」

男は何も言わずに黙って浩太郎を見つめて思案したあと、丸まった紙袋を丁寧に伸ばし始めた。そしてそれを綺麗にたたみ、一度においをかいでから胸ポケットへとしまった。

「これはもらっておくよ。君はいらねえんだらう？」

「好きにするといいさ」浩太郎は沈みがちな声でのろのろと言った。橋の上を見上げると、キリンみたいな細くて背の高い体格のビジネスマンと目があつて、彼はぶいとそっぽを向いて腕時計を確認しながら歩いていった。車が三台連なつて行く。こうしていると訳もない物音が四方八方から耳へ流れ込んでくる。

「計画は明日の十時に実行する。朝の十時だ。君は計画を知っているんだし、公平に執り行いたい。必ず来てくれよ」男は淡々と言った。

浩太郎は顔を男へ戻して、その場から男が消えていることにはたと気づいた。驚いて左右を確認したが男はいない。浩太郎は視線を地面へと落とした。水に濡れた跡があるはずだ。地面は濡れていた。

しかしその場所一部が濡れているだけでほかの場所は濡れていない。馬鹿な、一体どこへ？

突然耳元で男の声がした。

「俺の名前は年と、そう呼んでくれたらいいよ。年だ。明日の十時、きつと来てくれよ」

浩太郎はのどの奥から悲鳴がほとばしりそうなのを必死で我慢して振り返った。年と名乗る男はすでに数歩下がって穏やかに笑っている。浩太郎は何も言えずにいた。年は右手で口元を押さえ、含み笑いをして石段を駆けるように登っていった。彼の進んだ道には水跡が残り、しばらく眺めていると、うつすらと色をなくしていった。

その三

「パパ、ほら早くこっちへ来てよ」女の子が父親の手を引きながらいそいそと言った。

手を引かれる父親は苦笑いを浮かべながらも、言われるがままに従っている。その少し後ろでは母親が微笑ましい表情で二人を見守っている。

親が子供を愛するのに、親は何も見返りを求めたりはしない。無償の愛というやつだ。それを見ず知らずの子供や老人に向けて抱くのは中々難しい。それが電車の中で酔いつぶれて大いびきをかいているビジネスマンや、一人暮らしの老人に息子を装って電話をかけて金をだまし取るうとするような輩に対して抱くとなるとほぼ不可能になる。たまにそんなカスのような人間にも無償の愛を振りまけるような希有な人間たちがいるようだが、もしも全員が全員そんな人間ばかりだったら、世の中は平和になってみんながニコニコしてそしてその中に突然変異みたいに悪人が生まれると、結局はそいつが世の中を占めるようになるのだろう。面白いことがあるとすれば悪人が悪さをしていても、善人たちは無償の愛とやらでニコニコと許すんだらうことだな。浩太郎は思った。

「ねえ、わんちゃんがいるよ。白いやつ」女の子はペットショップの子犬のガラス窓にべったりと張り付いて、白いシーズーを無垢な目で眺めている。それを両親は互に見つめ合いながら優しく眺めている。

テレビの中で行われているホームドラマを、浩太郎はソファに横

になり、クッションに頭を半分沈めたままぼうつと眺めていた。テーブルの上には飲みかけのコーヒーが置いてあり、すでに冷め切っていて黒光りする塊と化している。部屋の中は電気も付けられず、おらず、テレビから漏れる明かりが壁や浩太郎の顔を様々な色に染め上げていた。

家へ帰ってきてからというもの、川での出来事が頭を離れず浩太郎は寝てしまおうと考えた。それで電気も付けずソファに横になって目を閉じた。しかし浩太郎に慈悲深い眠りは与えられることなく、結局寝付けなかった浩太郎は青白い暗闇の中テレビのリモコンを探し出してこうしてテレビを見ていたのだ（眺めていたという方が正しいかも知れない）。

先ほどから雨が降り始めていた。ポツポツとベランダを打つ音が聞こえる。しかし思っていたよりもそんなにひどくはならないらしい。風も弱くてどちらかというと静かな夜だ。

「わんちゃん可愛かったね」

少女が笑うのを見て、浩太郎は台詞を繰り返した。

「わんちゃん、かわいかったね」その声は機械的で、浩太郎の目は遠くを見つめているようで、冷たい。

浩太郎はもぞもぞと体をくねらせてソファの上に小さくなり、もう一度目を閉じた。やはり寝付けなさそうだ。年の姿が脳裏に浮かんでくる。彼は自分の顔をのぞき込みながらなにやら話しかけてくるようで、溜まらなくなつて浩太郎は体を起こした。テーブルの上の冷めたコーヒーを一気に飲むと、あまりの苦さと酸っぱさにカップの中へ全てはき出してしまった。苦い顔をしながら台所へ持つて行き、シンクの中へ流し捨てる。

ソファに戻って目一杯背伸びをした。それからだらしがなく背もたれに体を預けると、いつ切れるかも知れない長い息を吐いた。

気がつけばお腹が空き始めていた。雨はまだ僅かにふつてはいるけれど・・・コンビニでも行こう。

浩太郎は家を出た。

コンビニの前には数人の若者の集団が居を構えていて、地面にべったりと座り込み、そこいらにジュースのペットボトルを置いて話に夢中になっていた。父ならばきつと何か言っていただろう。自分もそうしたいが、なにぶん歳が近い故に逆に反感を買いそうだ。浩太郎は車を止めて店の中へ入った。

軽くファッション雑誌や漫画本を立ち読みしたあと、適当に弁当とジュース、チョコレート、それに暖かいお茶を買ってレジへ持つて行った。

弁当を暖めてもらっている間店員との会話は一切なかったが、ビール袋に商品を放り込むようにして入れる姿を見て、浩太郎はいらついた。

「おい、もつと丁寧に扱いなよ」

店員（大人しそうで外に溜まっているような連中には何も言えないが、ネットの掲示板では他人をボロクソにけなしているようなタイプ）は浩太郎の顔を一瞥してからあからさまにめんどくさそうな表情をし、舌打ちをした。その行為はさらに浩太郎をいらつかせた。「それに暖かいものとチョコレートって、別に構わないがせめて聞いたらどうなんだ？袋分けるかとかよ」

「すいません」

蚊がなくなような声で店員が言うのを聞くと、浩太郎は袋を受け取り、コンビニを出た。

若者の集団を過ぎ、車に乗り込むと強い力で車を発進させた。しかし駐車場を出る寸前で車を止めてバックさせ、若者の集団の前に止めた。お前は父さんのようにはなれないからな、と浩太郎は自分に言う。

「おい、お前ら！」浩太郎はドアを開けて若者に向かって言った。「悪いことは言わない、早く帰りな。向こうで警察がウロウロしていたぜ。それに君らの親だつてきつと心配してる！」

それだけを一気に言ってドアを閉めた。ミラーで彼らを見たが、予想外に反感は買わなかったようだ。若者たちはみな立ち上がり、

小鳥のような、呆気にとられたような顔をして車の方を見ていた。浩太郎は車を発進させて家へと帰った。

家へ帰って弁当を食べ、チョコレートを一口に入れると、ふいになんだかもの悲しくなった。

「死ぬだつて？ 最良の一日？ 許せるもんか」浩太郎は呟いた。

浩太郎は無意識の内に携帯を取り上げていた。時刻を見ると一時を回っていたが、構わず携帯を開き、父親の浩助へ電話をかけた。起きているだろうか？ 眠っているかも知れないな・・・だとしたらごめんなさい。

「もしもし？ 浩太郎？」父の声。

「やあ、父さん。元気にしてる？」礼節じみた挨拶をした。

「ああ、元気だが・・・こんな時間に一体どうした？」

「ううん、何でもなし。ただ声が聞きたかっただけ」

束の間沈黙があつた。電話の向こうからは紙をめくるような音が聞こえてくる。まだ仕事をしていたのか、本を読んでいたのか。

「父さん？ 聞いてもいい？」浩太郎が始めた。

「ん？ 何だ？」

「誰かが死のうとしていたら父さんなら止める？」

電話の向こうで紙をめくる音が止んだ。

「止めるだろうな」浩助ははっきりと言った。「考えなくてもいいことじゃないか？ 父さんはそれがお前だろうが見ず知らずの人だろうがきつと止めるよ」

「そうだね」浩太郎はうなずいた。

再び沈黙があつた。これはつい先ほどのよりも少しだけ長かったが、その間携帯電話の向こうから紙をめくる音は聞こえてこなかった。どうやら浩助は浩太郎のことを辛抱強く待っていてくれるらしい。これも無償の愛の一部なのか？ 浩太郎は自分の感情とはつゆ知らずの別のところで泣き出しそうになっていた。すぐに何か言おうとしたが何も言えず、片手で口をふさいだ。そして落ち着くまで深呼吸をしてテレビの漆黒の画面をちらりと見た。

「もう一つだけ質問してもいい？」

「言ってみなさい」浩助は静かに言った。

「その、女の子がいて、もしもその子が間違ったことをしたとする。そのことが間違っていることを分かって欲しいと思つて真剣に伝えるけれど、それでも伝わらなくて・・・そんなときはどうしたらいいんだろう？」

浩助は少し考えてから「私も女の子の人には本当の気持ちをつましく伝えられずに失敗しているからな。母さんには理解されなかった」

「ごめんよ、そんなつもりじゃ」

「ははっ、分かっているさ。お前の生徒の話だろう？」浩助は言つて、もう一度小さく笑つた。「大丈夫、お前は自分で納得して決定したんだ。その子に伝えることを。その子は今はお前のことを疎ましく思うかも知れない。だが大切なのはお前がしっかりと自分の判断をして、それを伝えることだ。きつと分かってくれる。お前が信じていればな」

浩太郎は膝の上に両方の肘を乗せた。「・・・そうだね。ありがとう、父さん」

「いつでも連絡しなさい」

感謝の言葉をもう一度言つてから浩太郎は電話を切つた。なんだかほつとしたような気分になった。まだ眠くはなかったが、しばらくしていれば眠れそうな気分だ。浩太郎はビールを一本だけ引つかけてから、眠りにつくまでソファの上に寝ころんで青白い天井を見つめながら耳を澄ましていた。そして明日、川に向かうことを決めた頃には意識が朦朧とし始めてきて、眠つた。

一週間前、とある小学校の五年生の教室で突然一人の女の子が泣き出した。面白がつて集まってくる男子生徒や驚いて距離を取る生徒、または素知らぬ顔でお喋りを続けている生徒などがいた。先生を呼びに教室を飛び出した生徒もいた。生徒たちの反応は様々だったが誰もが彼女のことをひとしきり心配した。

すぐに担任の千原浩太郎が駆けつけて女の子を慰めにかかった。女子生徒は浩太郎の顔を見るとさらにひどく泣き始めたが、しばらくして落ち着きを取り戻すと、鼻の頭を真っ赤に染めながら、もう大丈夫、と言った。

女の子の話を聞くと、大切にしていたノートが折り曲げられていたのだという。

「大切にしていたものだったので動揺しちゃったけれど、ただのノートなんだから我慢する」女子生徒は強い意志で我慢したが、目は悲しみを抑え切れていないようだった。しばらくすると唇が震え、嗚咽の発作とともに涙の滴が頬を伝わり落ちた。

「俺は誰がやったのか知ってるよ」

クラスの男子の一言で犯人は分かった。同じクラスの女子生徒数名。リーダー格の女の子がいて、その女の子が主犯だそうだ。担任はクラスの男子にその理由について心当たりがあるか訪ねた。

「あいつらにやる理由何てあるかな？ただ面白いからやった。ただ気に食わないからやった。そうじゃないの？」

しばしその答えに担任はたじろいだが、慌てることなく、半日考えたあと、リーダーの女子生徒を生徒指導室へ呼んだ。放課後のことだった。

「ちよつと聞きたいことがある。どうして呼ばれたか・・・分かるか？」

女子生徒は驚くほど単純に自分の方から罪を認めた。担任は思った。この子はきつと分かってくれるはずだ。大人びているし頭もいい。ただちよつとした悪戯だったんだ。それに少しだけ、どこか母に似ている・・・と。

担任は女子生徒の肩へ優しく手を置くと、ゆっくりと、だが厳しい言葉を使って女子生徒を叱った。女子生徒は僅かに瞳を潤ませながら、震える唇をかみしめてうなずいた。

翌日担任は相談室に呼ばれ、そこには教頭と生徒指導主任、そして上下紫色のスーツを着た三十代後半くらいの女性（まだ若いのに

発言や立ち振る舞いから実際よりも上に見られるタイプ）が座っていて、その女性は目をレーズ直後の競走馬のように血走らせていた。女は昨日叱った女子生徒の母親だった。そして謂われのない罪で自分の娘が咎められたことへの謝罪をしるとぶちまけた。さらには女子生徒の肩を掴んだことは恐怖を女子生徒に与えたことに繋がり、強制的なセクハラともとれる行為だと喚き立てると、「教育委員会への報告も考えている」そう言い残して帰って行った。

担任は厳格な態度で教頭へ今回のことの説明をした。自分は間違っただけをしてはいない。女子生徒もきつと分かってくれているはずだ。何ならもう一度話を聞いてもいい。

しかし教頭から出た答えは違った。教頭は小さく舌打ちをすると振り返って、不機嫌そうに言った。

「そんなことは必要ないよ、千原先生。君はまだ若いからその安っぽい正義感で熱血教師を演じたのかも知れないがね、処理をするのは我々の役目なんだ。分かる？これ以上問題を深くする必要はない」教頭はぐいっとその埃くさい体を寄せて続けた。「千原先生、あなたも疲れているようだし、一週間、休みを取りなさい。その間に全て終わっているだろう」

担任は反論した。「我々が全て悪いと？黙って女子生徒の行為を認めろと？」

「我々じゃあない、君が、だ。今回のことは君が責任をとれ」と教頭。「教師に成り立ての何も分かっていない、まだ学生のつもりか？いいか、社会には目をつむるべきことがいくつもあるんだ。それを勉強したまえ。どうやって渡って行くかをな」

ではノートを折り曲げられた少女の尊厳はどうなる？
そんな無意味な戯れなんかで・・・

何をしたら正しいのか、何が女子生徒のためになるのか？担任は考えて結論を出した上で女子生徒を叱ったつもりだった。しかし正しいと思っただ道は暗闇で、そこには道はなかった。あったのかも知れないが彼には見えなかった。彼の選んだ道はあまりにも脆く、細

く、そしてクリスマスの七面鳥のようにくたびれている。

川に着いた浩太郎はつま先で小石を蹴り飛ばしてから辺りを見渡した。川の水面は驚くほどに穏やかで青緑色に輝いている。対岸のごつごつした花崗岩は、時の経過で川の流れによって削り取られたものだが、今やその割れ目から植物が生え伸び、小虫羽虫の住処となっている。浩太郎は石に腰掛けて両手を揉んだ。

どうやら年はまだ来ていないようだ。

腕にはめたダイバースウオッチをみると十時まであと五十秒だった。父から受け継いだダイバースウオッチは父が若い頃、教師になった初任給で買った古いものだ。父はこのダイバースウオッチを自分がずつと欲しがっていると思いついていた（あながち嘘ではなかったが）。それで浩太郎が大学を卒業した卒業式の日の朝、ダイバースウオッチは受け継がれたのだ。抹茶色のベルトが汗を吸い、小気味よく光っている。小さな灰色のシミも“アジが出てきた”というやつだ。いつか結婚して息子が生まれたなら、自分も父と同じように時計を息子に託したいと浩太郎は思っていた。

「やあ待ったかい？」

突然耳元で声が出て浩太郎は悲鳴を上げそうになった。心臓がハンマーで殴りつけられたみたいに跳ね上がった。たしなまいそな気がした。

振り返ったそこに年がいた。忌まわしき年が（忌まわしき？）。服装は首元に薄い苔色のスカーフを巻いている以外は先日と全く同じだが、何か昨日とは印象が違って見える。それは自分の、この年という男に対しての精神的なもののせいだろう、と浩太郎は思った。昨日は面と向かって彼のことを見られなかったが、今はこうしてすっかり見られる。もしくは年自身の精神的な変化によるものかも知れない。

もちろん他の理由があるかも知れない。例えば昨日は空を覆いつくさんばかりに広がっていた、あの巨大な灰色雲がないとかの。

「ついさっき来たばかりさ」浩太郎は紛いものの笑みを浮かべて伝えたが、声が上がっていた。これから何が起きるんだろう？俺は少しでも年に恐怖を抱いていた？会いたくはないと。でもこうして真っ直ぐに見られるんだし、決着をつけてこいって、そういうことなんだろうな。「いや、やっぱり、待ちわびていたよ」

「いいね、その言い方」年は破願して、「借りになつたみたいだな」浩太郎も笑った。「別にいいさ」手をふらふら振った。

その四

年は表情を元に戻して腕を組んだ。「昨日はよく眠れた？俺はまいちだった。早めに眠るつもりだったのに、あつ今日は大切な日だからね。そのつもりだったのにドラマがやっていてね、ついついそいつを最後まで見てしまったよ。ああいうのは最後まで見せるようにうまく作られているね」

「俺の方は普段通りに眠れたよ」と浩太郎。

年はうなずいた。「そうか、いいことじゃないか」

「そうなるね」

「ところでちよつと聞いてくれないか？面白いことを思いついたんだ。昨日の夜だぜ。面白い話んだけど、聞いてくれるか？」

「ああ、どうぞ」

「ふふふつ、じゃあ遠慮なく」年は一つ咳払いをして、「北風さん、北風さん君はとってもハンサムだけど、この太陽である僕のように旅人のマントを脱がすことはできないね。太陽さんが笑って言いました。北風さんは愛想良く笑い返しこつ答えました。そうだね、でも僕だって、旅人が女の子だったら服を脱がすのは得意なんだけれどね……どう？」

浩太郎は小さくうなずいた。「結構いいよ、シャレが効いている。本当にあんたが考えた？」

「だろ？いいだろ？考えたのは本当に俺だぜ。使ってもいいけど。でも使う前には絶対に教えてもらった話なんだけどつて、そう加えてくれよ」

二人は笑った。

「君はどうだ？君も北風のように自分ができることしなければならぬこと理解しているかい？」年は突如ささやくような声で始めた。浩太郎は座っていて、年は立っていたので見下ろす形だった。

「何だつて？」

「君自身自分を理解しているか？と言ったんだ。さあ、本題に入ろう。今日を最良の日とするために」声の調子は大きくなっていて、彼は組んでいた手を解くと、何かを披露するみたいに両腕を左右に大きく広げた。「君は俺の計画を止めたい。俺は実行したい。今すぐにでも！ならば話は早いじゃないか！フェアに行こう！勝負をして勝ったものが表へ立てる、お互いを尊重した勝負だ！」

「何を言つて・・・勝負？」浩太郎の声は不安げだった。浩太郎は座ったままで年を見上げた。年は笑っている。

「そう、勝負！くだらない意地はよせ。生ゴミと一緒に月曜日になったら捨てちまいな」年は少し周りを伺つて、足場に気をつけながら歩き出した。「勝負はフェアじゃなけりゃあならないよ。誰でも一度はやったことのあることで勝負をする」年は急に立ち止まっつてしゃがみ込むと平たい石を一つ取り上げた。そして川へ向かつて助走を始めると、低く構えて勢いよく投げた。

投げられた石は勢いもそのままに水面を跳ねる。三、四、五・・・浩太郎はその石に釘付けとなつて、口を開いたまま見つめた。・・・六、七、八・・・八。石は水面を八度跳ねて飛び、崩れるようにして川底へ沈んでいった。

浩太郎は息をのんだ。のどが渴いている。「水切りが勝負の内容だつて？」そう言つた声は噎れて、聞き取れないほど小さい。

「今の結果は八だな。君も見ただらう？今は八だ。結構いい線行つていたんじゃないか？」年は感情こそあるが、冷やかな声で言つた。

浩太郎は用心深く訪ねた。「勝負には乗らなくちゃあならないのか？」

「でない」と計画は実行される。絶対にね」再び冷ややかな声。「君が勝てば俺は死ぬ。俺が勝てば、まあ実行はされないが俺は生き残る。勝負となれば生きようって気持ちに少しはなれるからね」

年の顔をまじまじと見つめ、それが本気であることを感じて取ると、浩太郎は乱れた呼吸をゆっくり整えて立ち上がった。手が痺れている。いや、震えているようだ。手をきつく握って押さえ込んだ。「ふふふつ、やる気になったみたいだね」年は面白がって言った。それからぴしゃりと手を叩いて、「それでははつきりとしたルールを決めよう。ルールは必要だ。あとになってああだこうだと問題になるのは勘弁だからね。なるべく簡潔にしておこうか。例えば・・・

浩太郎はどこか遠くを見ているような透明の視線を年に向かって向けていた。年が何か喋っているが耳には入ってきていない。それどころか何の音も聞こえない。今ならまだ間に合うのではないか？話し合いで解決できないかと、さあ言ったらどうだ？今やろうとしていることは本当に正しいこと？変な気分だ。すぐ。テーブルの上にテキーラの入ったショットグラスを幾つも並べておいて、その中の一つだけに猛毒が仕込んである。それを誰かと面と向かって座り、震える膝を必死に隠しながら一杯ずつ、どちらかがハズレを引くまで飲み続ける・・・そんな気分には似てはいないか？

「・・・い、おいおい、君」

浩太郎はぎくりとして、感情のこもっていない無表情の顔を年に向けた。それから小さな返事をしたがその声はくぐもっていた。そして妙な気分。頭の中では顔を真っ赤にしながら男が二人テキーラの飲み比べをしている。このままではハズレを引く前にどちらかが酔いつぶれてしまいそうな勢いだ。

「おいっつてば。君、聞いているのかい？」眉間にしわを寄せて不機嫌そうに年が言った。

「ああ、ごめん。ぼうつとしていた。ルールだな」浩太郎は肩をすくめた。

年は浩太郎の顔をまじまじと見つめ、それは浩太郎の精神状態を観察しているみたいだった。

「よし、まあいいだろう。大丈夫そうだ」年は言った。「勝負は水切り。決着は三回だ。三回勝負で執り行う！ただし先に二勝した方の勝ち」

「三回・・・二勝した方が」

「そう、二勝先取。判定は全て何回水の上を跳ねたか。簡単な方がいいだろうね。分かりやすくして。何回跳ねたかで決する。でもあくまでも一回一回の勝負だから一回勝負が決することに互いの記録はリセットさせてもらうよ」

浩太郎はうなずいた。

「使う石はこの川縁にある石ならどれでも使ってもいいことにしよう。この方が、これが一番平等だろうからね。ルールはこれくらいでいいかな？細かいことが出てくるだろうけれど、それは常識の範囲で判断して欲しい。くだらない屁理屈でこねるのだけはなしで頼むよ。そういうのは虫唾が走る」

「同感だ」浩太郎は微笑した。

どうやらまともに水切りをするらしいな。浩太郎は思った。何のつもりかは理解しがたいが、本当に水切り勝負をするらしい。だがこれに勝てば年は死ぬなんてことを止めるだろうし、それに勝敗がどっちに転んだって気晴らしになりそうなものだ。この男、年だつて本当に死ぬ気なんてあるんだろうか？ストレスとか疲れとか、そういうったものを発散させたいだけ何じゃあないか？そんなジョークなら体を張りすぎてるな。どちらにしても早く終わらせてしまおう。こんなことは意味のない勝負だ。

「どうだい？自身はありそうかな？それとも怖じ気づいた？もう止めにしたいとか。その場合は俺が不戦勝ということになるけれどね」年がニタニタ笑っている。

「不戦勝はないよ」浩太郎は答えた。「さあ、始めるんだろ。どっちからやる？お前さんからか？それとも俺からやる？俺はどちらで

もいけれど。こんな勝負さつさと終わらせてしまいたいね」

「そうかい？どんな風に考えてもいいけれど・・・じゃあ先に投げさせてもらおうかな。相手の記録を見てからだ、どうも緊張しそうな気がしてね」

「ああ、そうするといい。どうだっていいさ」浩太郎は片手をポケットに突っ込んだ。少しだけ後退して、雑に生え伸びた草むらの脇に立つ。頭を垂らし、へりくだったような野草が手に触れてチクチクと痛んだ。

年は早速石の探索を始め、用心深い目を真剣に地面へと向けた。かがみ込んで石を手に取り、首を小さく振って投げ捨てる。聞き取れない声で何かを呟きながら、年の茶色い瞳が光った。

「これにしよう！」年は言った。年は一個の石をまるでダイヤの原石か水晶の塊でも発見したかのようにそれを神々しく、自信満々で持ち上げた。それから浩太郎に向かって嫌みとも取れるような視線を一瞬だけ送って、川の方へと向き直った。

「決めたかい？」浩太郎は背中に言い放った。だが返事は帰ってこなかった。

空気がしんと静まりかえり、年はゆっくりと助走を始めた。そして踏み込むと地面に触れるくらいに低い姿勢を保ち、綺麗なフォームで石を投げた。

石は風を切って滑空して水面に触れると跳ね上がった。石は小気味のいいリズムと音で水面を跳ねて飛び、九回跳ねるとそれ以上は跳ね上がる力もなく、沈没船みたいに沈んでなくなった。

「九回！」年が声を上げた。「記録は九回だな！」そう言って振り返る。

「確かに、九回だな」浩太郎は静かに答えた。

「今のはかなりいい線だったんじゃないか？」満足な声。

「九回」

「俺の記録だ。あの石は使わずに持っておいた方が良かったかも知れないよ。いい厚さの石だった」年は浩太郎の元へ歩み寄り、不適

に微笑みかけて肩を叩いた。「さあ君の番だ。じっくり選ぶといい」
浩太郎は適当にうなずいて川の縁に行くと、ポケットに片手を突っ込んだままの状態ですを捜し始めた。ほとんど立ったままの状態から見下ろすだけで石を探る。勝負の結果云々よりも早く終わらせてしまいたかった。それで考えが変わるのならそれだけで。

「おい！何をやってるんだ！」年が呼びかけて浩太郎は顔を上げた。
「一つ忠告しておくがね、これは勝負なんだ！石選びだろうと、川を泳ぐ亀のたてる波紋であろうと、真剣に判断するをお勧めする！でないとなに思い知らさせることになる」

浩太郎はポケットから手を出して年に向かって高く上げた。年は腕を組んで少しだけ苛立っている様子だったがそれ以上は何も言わなかった。浩太郎は足下の石たちの上へかがみ込むようにして立つと、石を真剣に選んでいるふりをする。そして一つの石を選んで取り上げた。

しかしながら浩太郎の態度とは逆にいい石だった。重すぎずにとても薄い。石の間に入った青色と紫色の紋様が綺麗な石だ。

「見つけたよ！」と浩太郎。

「俺の記録は九回だからな！」年は追って声をかける。

浩太郎は川へ体を向け、ソフトボールのピッチャーが構えるように石を持った右手に軽く左手を被せ、少し前屈みに構えた。年の記録は九回だ。これ以上の記録を出すと、まだ一勝負目だけれど、年は自殺を実行してしまうということか？では適度な力で行こうか。八回ぐらいがいいんだけどな。

川縁の草が川上から順番にサラサラと音を立て始め、その音に乗るようにして風が吹いてきた。水面に幾本もの帯状の波紋を起こし、何事もなかったかのように川下へと消えてゆく。浩太郎は風が通りすぎるのを静かに待った。

その五

川の上へと繋がる石段の一番上にはベンチが一脚置かれている。

川沿いを散歩する人がほつと一息ついて休憩するためだ。濃い青色のペンキが薄く削れ、所々剥げ落ちたベンチは一体いつの頃からそこに設置されているのかは分からない。何度かペンキも塗り替えられた。よく小さな老夫婦が座っているのを通りがかと見ることがあるが、今日はいない。あのベンチに座るとこの辺りが一望できる。自分たちはどう見えているのか。

浩太郎は踏みだし、手にした石を目一杯で投げた。石はすぐに着水せずに遠くへ飛び、そこから細かく水面を跳ねて水へ沈んだ。八回？九回？浩太郎にははっきりとは分からなかった。

「今のは？」と浩太郎。

間をおいて年は答えた。「今の記録は八回だな」

浩太郎はほつとしてうなずいた。「そうか、じゃあ一勝負目はあなたの勝ちだな」

「そう、俺の勝ち・・・」

浩太郎はぞくつとした何かを感じて（それは多分恐怖だったんだろうと思う）、一歩だけ後退した。小さな石に足を取られてよろめいた。

「プロ野球選手、千葉ロッテマリーンズの渡辺俊介ってピッチャーのことなんだが、知っているか？彼は水切りで三十二回って日本記録を持っているらしいぜ。あっ、ちなみに世界記録は五十一回だよ。それにしても三十二回！今の君の記録何かよりも四倍も多い！ふふ

ふっ、もしも彼との勝負だったら勝負にはならないだろうな。水切りには最高の角度や速さみたいなものがあるんだとさ・・・でもそんなことを考えながら子供たちは水切りをするかい？しないね」

「それがどうかしたのか？渡辺俊介？」

「待ちなよ、俺は精神的にも通じる話をしているんだ。つまりこういうことさ。彼らは勝利するためにならあらゆる計算をしてあらゆる準備をしてから挑戦してくる。自分たちが納得した上で決定するために。そうすれば認められるからね」年の目が浩太郎を見据えていた。「さあ一段階進んでもらおうか」

「えっ？」

考える間もなく浩太郎は奇妙な感覚を足下に感じ取った。足下が冷たい。最初浩太郎は間違っって川の中へ入り込んでしまったのではないかと思っった。だが違っう。自分はちゃんと川縁に立っっている。冷たい感覚は靴の中へ染み入ってくると徐々に足を這い上がっってきた。ズボンを濡らしパンツに入り込み、腰の上辺りでその感覚は止まった。そんな馬鹿なことって・・・何も見えはしないが確かに自分の腰から下が川の中へ入っっている感覚が浩太郎にはあっった。よろよろとよるめいたが水による抵抗があるわけではない。しかしそこには水があり、自分はそれにどっぷりと浸かっっているではないか。

「さあ、君、あとがなくなっったね。次負けたら全身川の中へ沈んでもらっう。それが計画。それが目的」冷徹で低い声で年は言っった。

「どうして俺が・・・そんな、川に入っっていたのは自殺するためじやあなかつたのか？」浩太郎は焦っって言っった。

「そんなことは一度も言っってはいないよ。ずっつと。俺の計画は一つだけなんだからさ」

「これは一体、どういっうことなんだ？」

「さあね。ただ一っつ言えるのは今度君が負けることになっつたら君は確実に溺れ死ぬんだらうね」

浩太郎は愕然として肩を落とした。どうして？何が起こっっているのか分からない。呼吸が乱れて心臓の周りを不安な靄みたいなもの

が渦を巻いて取り囲んでいるのを感じた。

「ふふふつ、言ったはずだが、真剣にやることをお勧めするとな。なめていた？さっきの一投、君は手を抜いたな？」

「そんな、俺は手を抜いてなんか・・・」

「いいいいいや！君は抜いたね？」年は荒げながらも青ざめた微笑みを向けた。「こんな風に思ったのか？これにわざと負ければ相手を救えるし、勝負も早く終わる・・・そんな風に」

「・・・その通りだよ。だって俺が負ければと思って・・・第一こんなこと・・・」

「それがなめていると言っているんだあ！」年は激しい剣幕で浩太郎を指さした。「公平でなければいけないとさっきから言っているだろうが！理解できないのか？この間抜けが！公平さは相手を尊重することだ！尊重は相手を認めることだ！」

浩太郎は見えない川に沈んだ自分の下半身を見下ろした。川は深く遙かな闇に続いているような気がする。だが深い深い何よりも暗い川底はしばし気を落ち着かせた。

「すまない、俺は知らなかった」と浩太郎。

「すまないなんて言うんじゃない！」年は首を振る。「聞きたくもない。お前はいつもそうだ。納得した、認めた、そんな風に自分に言い聞かせて判断し決定しているくせに、くだらない考えで、くだらない感情を生み出すんだ！親父とお袋の離婚のとき、お前はお袋の料理を食べなくなる、抱きしめてもらえなくなるからと躊躇しただろう？小娘を叱るとき、こんな可愛らしい子がイジメ何てするだろうかと勘ぐっただろう？自分は間違っている・・・」

浩太郎は絶句した。何かを言おうとしたが唇が震えだして、浩太郎は唇を噛んだ。目の前に鏡があったら見られたもんじゃないだろう。きつと大きなクマが目の下にできて死人のような面をしている。

「お前は・・・一体何者だ？」浩太郎は絞り出した。

「まだ気づいていないのかい？」

「一体誰だ？どうして俺のことを知っているんだ・・・」

「俺は・・・君自身だぜ・・・」

浩太郎ははつとして年の手首を見た。そこには父が自分にくれたのと同じダイバーズウォッチが巻かれていて、日の光に反射しながらキラキラと光っている。汗を吸った苔色のベルトも同じ。不格好で必要以上に大きな文字盤も同じ。全く同じダイバーズウォッチだった。

「俺だつて？」

今や事情は明らかになった。俺は昨日飲み過ぎて眠ってしまった。一本だけ飲んだつもりだったが、一本だけじゃなかったのだ、きつと。それでこんな奇妙でリアルな夢を見ているんだろう。画家のダリが夢の世界を絵画にしたりするけれど、何て言ったかな？ シュールレア・・・？目が覚めたらこの体験を文章にして、きつと面白いだろう。父さんにも話して、俺は陸で溺れそうになった魚だと言おう。

冷たい感覚。恐ろしい川底の暗闇。

「さぁ続けるぞ」

年は小石の散らばる場所へ降り立ち早速石を選び出した。そして浩太郎が見定めるまでもなく小石を一つ取り上げると、浩太郎の前へぐいと押し出した。

「これで決めてやる」年は言い残して川へ向かうと石を投げた。低く、鋭い回転をかけたそれは勝負に徹した投げ方だ。記録を狙う投げ方。

石は風を切つて突き進み、着水すると、小刻みに震えながら水面を走る。そして二人が見守る中、石は十三度水面を打って沈んだ。

「十三だ・・・文句はないな」と年。

もしもその感情がどこから来たのか？そう聞かれても答えることはできなかつただろう。精神的には車のトランクに飲まず食わずで三日もぶち込まれていたみたいに不安定だったし、肉体的には疲労感があった。しかし浩太郎の中には怒りの感情が込み上げてきていた。今すぐにもこの目の前の男に飛びかかって殴りつけてやりた

い。だがそれだけはしてはいけない。絶対に。俺は勝負で勝たなければいけないだ。

怒りで口がきけなくなっていた浩太郎は年を押しやり、石を捜し始めた。しかし石は簡単には見つからない。生死をかけた石だ。考えれば考えるほどどれも失敗しそうに思える。それらしい石を取り上げて翳してみるが大したことはない。浩太郎は一つを取り上げると向こう岸に向かって思い切り投げた。石は向こう岸に届き、岩に当たって川へ落ちた。もう一つ力任せに投げ捨てた。石は近くの大きな岩に当たって砕け落ちた。

しばらくしてその姿を見かねた年は鼻を膨らましながら進み出た。「ルールを一つ追加させてもらうよ」年は言った。

「何だつて？」振り返る浩太郎。

「一分だ。石を捜す時間を一分としよう。じゃなければいつまで経つても見つげやしないみたいだ。このまま見つけずに結果をひたすら先延ばしにしようとするって、そう言うことも考えられるからな」

「そんなことはしない」

「可能性を言っているんだ」

「でも俺はそんなルール・・・」

「ふふふつ、ほら、見てみなよ」年は浩太郎を遮るようにして始めた。「腕時計から短針と長針が消えた。秒針だけの時計・・・どういうことか分かるかな？認めたということさ。君がこの新しいルールを納得し、それを認めたからそうなったんだ。ふふつ、特別にここから一分でことにしてあげよう」

浩太郎は時計を見つめた。確かに時計の針は秒針以外のそれが消え、針は無情に時を刻んでいる。

「何をしているんだい？ほら、あと五十秒しかないよ。急いで石を捜して」

浩太郎は石を捜した。時間が迫ってくる。額からは玉状の汗が噴き出していて、腰までの冷たい水の感覚は今に全身を包み込んでしまいうさだ。

カチカチカチ・・・迫る時間・・・

「これだ！」浩太郎は叫び、石を掲げた。ちらりと年に目をやると腕時計と見比べながら納得した表情を見せている。川へ体を向けて自分をイメージした。低く体を構えて投げるイメージ。そして成功するイメージ。

浩太郎は石を回転させて投げた。着水して跳ね上がる石。最初は幅が大きく跳ね、その間隔がだんだんと狭くなって行く。十二、十三、十四、十五、十ろ・・・石は沈んだ。

「今のは・・・引き分け!？」浩太郎は不安そうに言った。

「いや、今の勝負は！」後方から年の声がした。振り返る浩太郎。

「今の勝負はどうやら君の勝ちらしいよ」

「そうか、俺の勝ちか、はあ、はあ、これで勝負はイーブンになっただけだな」浩太郎が返す。

「勘違いするな、ま、だ、イーブンになっただけだ！」年は言つて顔を背けた。

年は余裕そうな顔をしてはいるが、浩太郎は見過ごさなかった。年の額にも汗が浮き出始めているのを見て取ったし、何よりも年の目は憤慨して苛立っているようだった。年は何もついていない自分のズボンを手で何度か払った。多分冷たい水の間、あれが彼にも来ているはずだ。浩太郎は繋ぎ止めたことにほっと胸を撫で下ろした。

ふらふらと疲れた様子で年のいるところへ戻った浩太郎は、その窪んだ目を年に向けた。この目は逆に年の心を驚かせた。浩太郎の目はついさっきまでびびって萎縮していたものの目とはどこか違う。怒りのせい、イーブンに戻したからなのか、少なくとも勝ちに来ている目だった。

「どうして今更出てこようと思った?どうして今?」年の隣に立った浩太郎は手を組んで立ち、出し抜けに聞いた。ささやきかけるように。

「ふん、今に始まったことじゃあない。俺はずっと表に出てきたか

った。だが二番手に甘んじ、お前の中に居続けていた。どうしてか？俺は少なくともお前を認めていたからだ」

浩太郎は少し驚いた表情で年を見た。すると年も浩太郎のことを鋭い目で見ていた。

「だがお前は俺のことを認めようとはしない。あのときもそうだ！一人で勝手に決めてしまいやがって！俺はな、親父にじゃなくお袋について行きたかったんだ！あの暖かさの方が良かった。それにあの小娘のことだって、どうして安っぽい正義感で注意なんてしやがった？」年は言った。ほとんど怒鳴っているのに近かった。

「俺はそれが正しい道だと・・・」

「それが安いというんだ！目を閉じていればいいということだってあるんだぜ！わざわざことを大きくしたのが正しい道か？そうさ、お前は周りを見ていない。だから俺のことも無視し続けてきた・・・そうだろう？」

「あんたのことは・・・知らなかった・・・」浩太郎は首を振った。「知らなかった？いいや、お前は知っていたはずだ」年は人差し指を立て、浩太郎の胸にドンと押し当てた。勢いで浩太郎は二、三歩下がった。「思い返してみろ！いつもお前は自分に問いかけてきた俺に問いかけていたんだ！俺は色々アドバイスをしたがね、最後にはお前一人で決めてしまう。俺のことを絶対に認めようとしなない認めないということは尊重すらされないということ。俺には尊厳がないのか？」

「そんなことはない、もしも知っていたら認めていたさ」

「まあいいだろう。どちらにしたって俺はこれからこの勝負に勝ってみせる。それ俺を俺として認める第一歩になるだろう。お前は引っ込んでもらおうよ。今日からは俺が表に立って、この勝負に俺が勝って、俺が決定権を持ってやる！」

年は進み出て石を捜し始めた。浩太郎はその姿を見ながら自身のことを考えてみる。確かに思い起こしてみると昔から自分自身に問いかけるように聞いて、物事を判断してきた。

なあ、浩太郎、どう思う？なあ、俺さあ、どう？お前は父さんにはなれないよ。浩太郎、浩太郎、俺、俺、母さんについて行かなくてもいいのか？こんな子がイジメするもんか。きっとさっきの男子がやったんじゃない？そこは我慢しておけよ、うるさいことに、まずことになるぞ。なあ、よく聞けよ、浩太郎・・・

その六

浩太郎はもう一度年の姿を見た。汗を流して必死に石を捜している。そして彼のことを認めざるをえなかった。彼はいつも側にいたんだ。浩太郎は思った。

「三十六秒だ！」年は嬉しそうに石を取り上げた。

息を吐き、構えを作ったあとで年はぴたりと動かなくなった。集中しているらしい。その緊張感が浩太郎にも伝わってくる。彼は生きようとしている。表に出ようとしている。そして認められようとしている。

風がぴたりと止んで、全てが静まった瞬間に年は石を投げた。石はこれまでに一番の勢いと軌道で水面を飛び跳ねる。綺麗な光景だ、浩太郎は本心で感じた。石は水面を十八回も打った。年の石が作った波紋は綺麗にしばらく残り、川の流れに消えていった。

「十・・・八回・・・やったぞ、やったぞ！」年は叫んだ。

年が最高の記録を出した。しかし浩太郎は自分を落ち着かせていた。父からもらったダイバーズウォッチをそつと片方の手で覆い目を閉じると、フォンプオンという自動巻時計特有の音が聞こえてくる。冷たく小さいその中から聞こえてくる音は、言わばこの腕時計の心臓の音なのだ。ふつと息を吐くととても落ち着いた。冷静でいられて、まさか死が間近に迫っている状況でこんなに穏やかな気持ちになれるとは、浩太郎自身も思いもよらなかった。

「さあ、交代だ。これで最後だからね」戻ってきた年はやりきった顔をしていて、しかし疲れていた。

浩太郎は何も言わずに年の横を通り過ぎて小石の散らばる場所へ降りた。年は自分のことを笑みを浮かべて眺めている。それは勝利者の表情だった。浩太郎は石探しを始めた。だがやはり二勝負目と同じだ。どれも同じ石に思えてくる。どの石にも顔がついていて、眉間にしわを寄せながらそっぽを向いているようだ。僕は成功しない、別のを選んでくれよ。僕は勘弁してよ。僕は・・・まるでそう言っているようだ。

落ち着いてはいたが次第に心臓が高鳴り始めた。そして喉が渴き始めた。唾液を飲み込もうとしても舌が張り付いて飲み込むことができない。代わりに咽せて、浩太郎はひどく咳き込んだ。しかし時間は過ぎてゆくばかり。浩太郎は時計を見た。あと十五秒しかない。続いて年を見た。彼は腰に手を当てて見守っている。石を何個も手に取る。駄目だこれでは勝てない。他の石を取る。これも、これも駄目だ。

俺は・・・勝てないのか・・・
物事の決定権は誰にある？それは浩太郎、お前自身の中にあるんだ。だから人は納得するまで考えなければならぬ

「父さん」浩太郎は呟いた。
父さん、俺は勝てないかも知れません。今まで俺自身よく考えてして物事を決定してきたけれど、間違っていたんでしょうか・・・僕は、母さんに父さんの気持ちを知って欲しかった（父さんの気持ちは知っていたけれど、母さんはいつも新しい父さんができるって話しかしなかったから）。女の子にはノートをへし折られた子を認めて欲しかった。その子の存在を。単純な感情なんだ。悪戯じみたことじゃないか。どれもこれも難しくはない、単純な感情・・・でも、本当に難しいよ。僕には・・・。

大切なのはお前がしっかりと自分の判断をして、それを伝えることだ。きつと分かってくれ。お前が信じていればな

「ありがとう、父さん」浩太郎はぼつりと言った。

「一分だ！一分経った！さあ早く石を取って！」年が呼びかけた。

浩太郎は年に向かってゆっくりと振り返り、石を翳して見せた。年は小さく、あっ、と声を漏らした。握られた石は二勝負目に浩太郎が退かして投げた石がぶつかって割れた、あの石だった。浩太郎は手にした石をじつと見て、息を吐き、川へそつと近づいた。

穏やかな風が吹いてしんと静まっている。誰も何も声はしない。最後の一投。浩太郎は一呼吸したあと石を投げた。

鋭く切り裂くような唸りを上げて石が飛んでゆく。水面を削り取り失踪する浩太郎の石。浩太郎にとって最高の一投だった。十四、十五。石は水面を走った。しかし浩太郎の石は力と勢いをなくしている。どうやら届きそうにもない。十六、十七・・・

「勝った！俺が！」年が両手を挙げて叫び声を上げた。「表舞台へ立つのは俺の方だ！」

浩太郎は何も言わずに跳ねる石を見ている。

年が自身のその勝利を確信した、自身が表へ立つことが現実となるそのとき。目の前で予期せぬことが起こった。川の中を何か黒いものが泳いでいる。偶然にもそれに当たって石は距離を伸ばし、水面を十九回打ったところで沈んだのだ。

年は驚愕の表情を川に向けていた。

川の水面に黒いものの正体が現れる。それは一匹の体がオリープ色のアオダイショウだった。石はアオダイショウに当たって十九回跳ねたのだ。

浩太郎は振り返り、年を見据えたが何も言おうとはしなかった。

「そんな、認めないぞ。はっ、二勝負目に、さっき投げた石で・・・反則だ！やり直しだ！今すぐにやり・・・！」そこまで言って年は口をつぐんだ。観念した表情になり、肩を落としている。年は悔しそうな顔をしながら自分の体を見下ろして、深いため息をついた。「・・・俺の負けだよ、どうやら・・・心が負けを認めてしまったらしい。冷たい感覚が体を登ってきてるんだよ、今ね。もう少しだったのに・・・」

浩太郎は年に近づいてゆっくりとうなずいた。

「聞かせてくれよ」年は言った。「あの蛇はあそこにいることが分かっていて石を投げたのかい？」

「いや偶然だよ」浩太郎は答えた。

「そうか、やっぱり蛇は俺にとつてのアンラッキーアイテムだったってことか・・・」

「すまない」と浩太郎。

「謝るなって、そう言っただろう？」年は笑った。すると浩太郎も笑いだし、最後には二人して声を上げて笑った。

年の体は今にも消えてしまいそうな、川の水のような透明になっていた。浩太郎は肩に手を置こうとしたが、すり抜けて触れることすらできない。

年は観念したように目を閉じ、最後に一言だけ言った。

「浩太郎、俺の代わりに、あとはよろしく」

浩太郎が瞬きをすると、そこにはすでに年の姿はなかった。

数日後、浩太郎は川へ散歩にやってきて、青くペンキの剥げたベンチに腰掛けていた。よく晴れた日で雲の少ない穏やかな日だ。最近涼しくなってきた。冬が来るとすればもうそろそろだろう。川縁に生えた背の高い枯茶色の草を、風がのんびりと揺らしている。

年の言ったことは全て当たっていたのかも知れない。俺自身は正しいと思っただけでも、心のどこかでは間違っていると判断してしまう自分があるのだ。そういつた心が年を生み出した。年はそんな俺に、あとはよろしく、そう言っただけで消えてしまった。

「難しいな。正しい判断は」

川では大学生くらいの若者が水切りをして遊んでいた。浩太郎はベンチから腰を起こし、彼を横目にその場を離れていった。川縁からは学生の嬉しそうな声が聞こえた。

「よし！俺は十回だ！」

その六（後書き）

「不安定な戯れ」 完結です。

もう一人の自分、ドツペルゲンガーと出会つと、出会つた人は死んでしまふといひます。一方で現れたのは自分の危険を知らせてくれるためだとも。もし彼らと面と向かつて話を出来るとしたら、彼らは一体どんなに興味深い自分の知らない自分を知っていてくれるのでしょうか？

“水切り”という誰もがしたことがある“戯れ”を、いかに真剣に描くかに挑戦しました。

感想を聞かせてもらえたら嬉しいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5681k/>

不安定な戯れ

2010年10月8日15時02分発行